3.11メモリアルネットワーク

# 若者トークの歩み

2018. 3～

## ① 2018. 3. 26～28

記念すべき第１回は石巻市にて、とにかく話してみようと**平日の日中、３日連続**で開催。聴衆は少数だったが熱いトークを展開し、次回へ向けての手応えを確信。

噂を聞きつけ
３日目は大盛況

震災、被災者支援

若者が意見交換

県内の10～20歳代の若者が東日本大震災の被災体験や被災者支援について語るイベントが26日、石巻市の「南浜つなぐ館」で始まった。

春休み中の若者が語り部や聞き手として参加し、活発に意見を交わしてもらおうと、昨年11月に同市で発足した「3・11メモリアルネットワーク」が企画した。

同市大川地区出身で、大川小旧校舎などで語り部活動に取り組む東北福祉大1年の永沼悠斗さん(23)は、スライドにかつて住んでいた同地区の映像などを映しながら、思い出を語った。

写真＝。また、高齢者や障害者らに配慮した福祉避難所の開設を呼びかけるとともに、4月からは手話を習うといい、「手話も使って語り部を行うことで、多くの人の命を救うことにつなげたい」と話した。

イベントは27、28日も開かれ、両日とも午後1～4時に3回、それぞれ別の若者が登場する。参加無料。問い合わせは、同ネットワーク事務局（090・9407・3125）へ。

河北新報

## ② 2018. 5. 4

第２回はゴールデンウイーク。前回と同じ会場で、多くの方にトークを聞いてもらった。

震災伝承 若者ら議論

石巻

より若い世代へ 課題探る

東日本大震災の被災地で、語り部などの伝承活動をする若者たちが集う「あのひのいろんなこと 若者トーク」が4日、石巻市南浜町の南浜つなぐ館で、活動の現状や今後の課題について、それぞれの思いを伝播した。

若者が自分たちの活動を紹介した後、会場を交えた座談会に入った。東松島市野蒜地区の語り部を務める志野はのかさん(19)は「伝承の切り口を工夫にしながら、今後も語り部に取り組みたい」と話した。

一方、石巻市の「いのちの石碑プロジェクト」の鈴木花菜さん(18)は、「震災後に知らないまに、危険性を伝えていくのが課題」と話した。

震災伝承のこれからについて、若者が本音を話し合った。

河北新報

## ③ 2018. 8. 7

東松島市赤井で開催。地元の**小学生が多数参加**。小学生時代に震災を体験した学生の話がリアルに伝わったようだ。

## ④ 2018. 12. 22

**名取市**の伝承施設「閖上の記憶」が会場。
閖上中学校の卒業生も初参加。体験と想いを語った。
また、石巻の中学生が、未来の**街づくりのために3.11を忘れてはいけない**と主張。

## ⑤ 2019. 3. 24

宮城の他、**熊本**地震の後「阿蘇の灯り」という団体を立ち上げ、伝承活動や様々な交流を行っている若者が参加。
会場の**旧気仙沼向洋高校**は3月に遺構・伝承館としてオープンしたばかりで、午前はみんなで見学した。

## ⑥ 2019. 5. 2

東松島市の防災教育施設**「キボッチャ」**（旧野蒜小学校）で開催。8人の若者が登壇。個人トークの後、４人ずつのグループディスカッションを行い、これからの活動について意見を交わした。**次回は東京で**やることに決定！

## ⑦ 2019. 8. 11

**７回目は、花の東京開催です。**
**関東の若者ともコラボ！**
**どうぞよろしくお願いします！**

街の音

今年を振り返って

被災地の未来

そういう子をなくしたいと思った。伝承に取り組む人らの運営組織「3・11メモリアルネットワーク」が開催する「若者トーク」の4回目。別々にやっていた若者同士が集まって話し合った。

ある日曜日、石巻、東松島、名取の10～20代の9人が参加した。

東松島市の小学生の時に被災した。高校生の大川小の石碑を作っている。「今、取り組むことに立って「現在」という未来を見つめ、その先の未来に向かって、次の世代がわかりやすい形に変換するのも大事だな」と、伝える方を模索する。

震災が過去の出来事として語られることが増えた。だが、被災地では、今も続く現在進行形で、今後も向き合い続けねばならない未来である。その未来も、悲しみばかりではない。若者は「あの日を振り返るよりも、あの日を乗り越えるよりも、彼のように、未来を見据えるべき」と感じ取り、今を生きようとしている。

【百瀬徳彦】

震災伝承のこれからを語り合う若者ら―名取市の震災伝承施設「閖上の記憶」で

毎日新聞

※新聞記事の掲載は許可を頂いています。